

## 職業奉仕と近江商人の三方よしの精神

「職業奉仕は難しい」という言葉をよく耳にします。ロータリーに入会して4年ほどたちますが、私もいまだによくわかりません。手続要覧を開くと、職業奉仕とは「事業と専門職における高い倫理基準を推進し、あらゆる尊厳ある職業の価値を認め、あらゆる職業に従事する中で奉仕の理想を育むことを目的とする」と記されています。正直なところさっぱり分かりません。事業と奉仕という次元の違う概念が同列に扱われており、事業の活動の中で「社会貢献活動」を組み入れなさいという話でもなさそうです。重厚な言葉のレトリックでなにか大事なことを言っているようで、実はスローガンとして、耳さわりの良い抽象的な言葉を羅列しているだけのようにも思えます。

ロータリー文庫で職業奉仕について調べてみました。そこには、数多くの熱い文章が並んでいます。ですが、「職業奉仕とは何ですか？」というシンプルな問いに、明快な答えは見つかりません。調べ進めていく過程で、1906年1月の設立時に定められた最初の目的には、「本クラブ会員の事業の利益の増大」とありました。ポール・ハリスがシカゴで始めた頃の純粋な意図だったのでしょうか。ロータリーが拡大する過程で倫理・道徳的な要素が強化され「奉仕の精神」が軸となり、「職業奉仕」という概念が形成されてきたのかなと想像します。

実際の経緯を詳細に紐解いたわけではないので、これが正しい解釈かどうかはさておき、この歴史を振り返ると、職業奉仕は意外とシンプルに考えてよいような気がします。私なりの解釈では、事業を通じた長期的な利潤と成長の追求そのものが、職業奉仕の本質です。いや、もっと言えば、少子高齢化がすすむ昨今の厳しい経済状況を考えると、事業を継続すること自体が職業奉仕ともいえます。現代のビジネス社会の競争は実にシビアです。高い倫理観を特別に掲げなくても、顧客の目は厳しく、質の伴わない高価な製品やサービス、劣悪なものはすぐに敬遠され、売上を失います。顧客のみならず、従業員、取引先に対しても独善的にふるまえば、彼らは離れ事業の継続は難しくなるでしょう。企業を取り巻くステークホルダーとの良好な関係構築し事業を継続していく、そのこと自体が社会にとって価値を創造しているともいえるでしょう。それこそが、「職業上の高い倫理基準を保ち、役立つ仕事はすべて価値あるものと認識し、社会に奉仕する機会としてロータリアン各自の職業を高潔なものに」する行為になるのかと考えます。

事業継続の努力が、「奉仕の精神」の実践につながると考えれば職業奉仕も簡単になるような気がします。職業奉仕は日常のビジネス運営の中に溶け込んでいるともいえます。

日本古来の経営哲学にも、この考えに通じるものがあります。江戸時代からの近江商人の格言「三方よし」－売り手よし、買い手よし、世間よし－は、ステークホルダーを大切にすの典型です。「He profits most who serves best」－最もよく奉仕する者、最も多く報いられる－や「Service above self」－超我の奉仕－を日本語に意識すれば、まさにこの「三方よし」に重なるのではないのでしょうか。